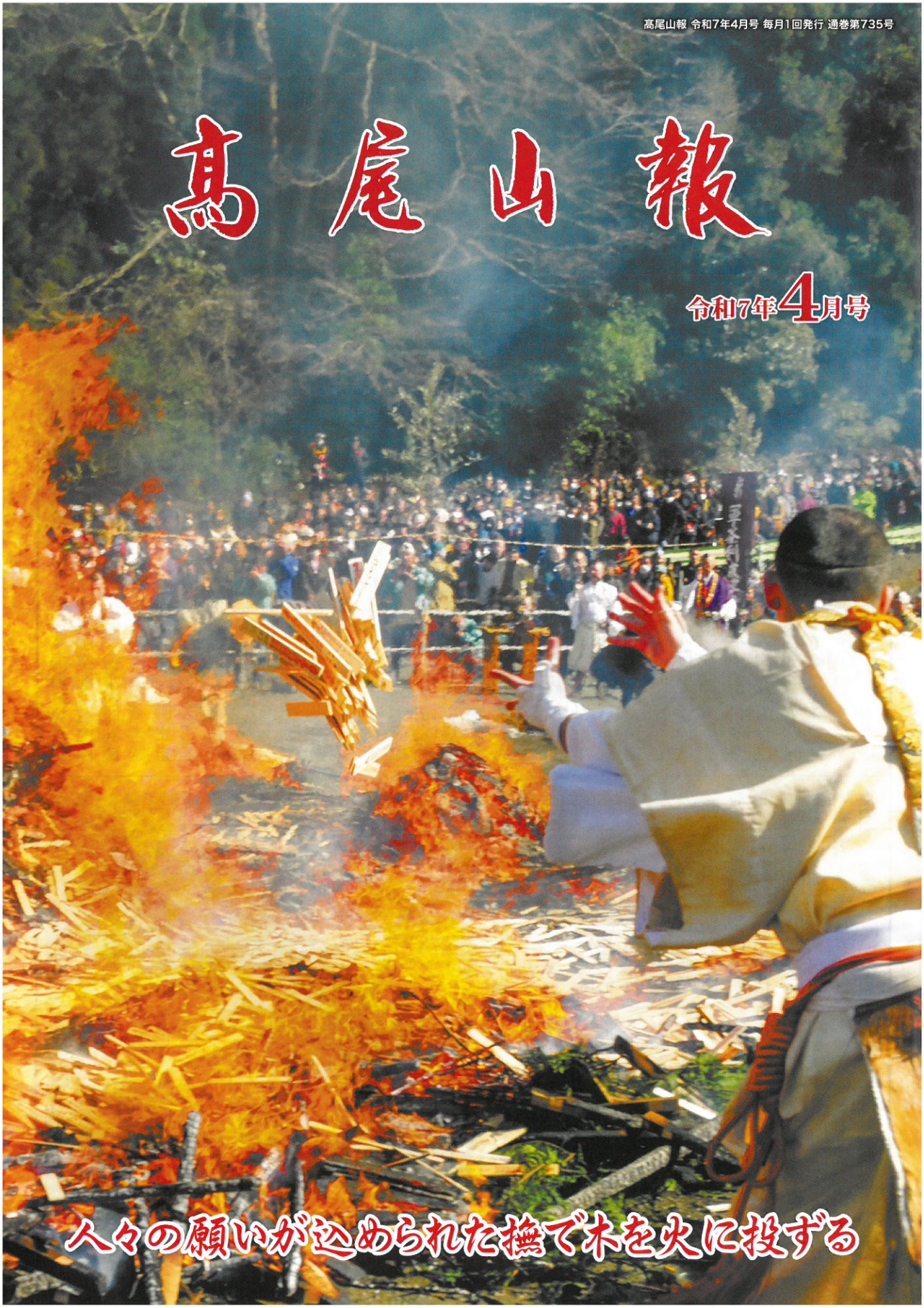
高尾山報 令和7年4月号 毎月1回発行 通巻第735号

高尾山報

令和7年4月号



人々の願いが込められた撫で木を火に投ずる

法の水茎

大正大学講師　髙橋秀城

(154)

落花語はずして空しく樹を辞す
流水心無くして自ら池に入る
（白居易『白氏文集』）

（落花は何も語らずに、はかなく樹木から飛び去っていく。流水は何の心も持たずに、そのまま池に注ぎ込んでいく）

春から夏への変わり目を意味する八十八夜（今年は五月一日）が近づいてきました。新緑に新茶、春牡丹や薔薇の開花も待ち遠しく感じます。爽やかな五月を前にして、春が足早に過ぎ去っていきます。

思えば、私たちを楽しませてくれた桜の花びらは、何を思ってハラハラと散り急いでいったのでしょう。自然は当たり前のように、次の季節へとバトンを渡していきます。

鶯の声に桜ぞ散りまがふ
花の言葉を聞く心地して
（『西行法師家集』）

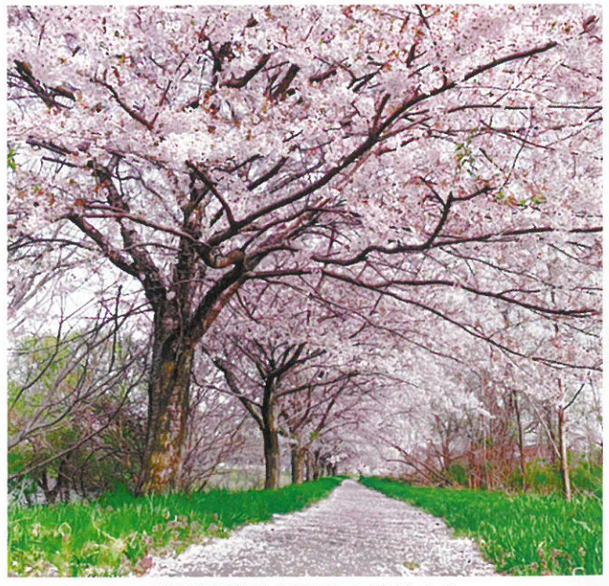
（鶯の声に合わせて桜の花が散り乱れている。花の言葉を聞くような気持ちがして）

梢から聞こえる元気な鳥の囀りは、もしかしたら花の言葉を代弁しているのでしょうか。風に舞う桜吹雪を見つめながら、語り尽くせぬ春の想いに耳を傾けてみます。

ソメイヨシノの開花日をつないだ桜前線も、四月下旬ともなれば東北地方から北海道へと歩みを進めているでしょう。先月号では宮城県名取市閖上地区を中心とした篤い信仰について書きましたが、今月は花の便りとともに北海道に見られる弘法大師空海（七七四～八三五）伝承を眺めてみたいと思います。

北海道とお大師さまとの結び付きをめぐっては、例えば道央小樽市の南西部に天狗山という山があります（標高五三二・五メートル）。港湾都市を一望できる小樽天狗山は、その名の通り古くから山岳信仰の霊域でもありました。今でも山中の登山道には弘法大師四国八十八箇所霊場が残されており、山頂の天狗山神社の傍らには、居並ぶ石仏さまとともにお大師さまの修行大師像（昭和四年（一九二九）九月二十八日建立）が聳え立っています。「大正期初めには修行の道ができていた」（『日本歴史地名大系』）と言われることから、スキーや夜景を楽しめる一大観光地として発展する前から、この地を見守ってくださっていたのでしょう。

また、今から二十年ほど前には、北海道全域を巡る「北海道八十八ヶ所霊場」が開創されました（平成十八年（二〇〇六）年十月十五日）。行程はおよそ三〇〇〇キロメートルにも及ぶとのことで、四国遍路の総距離（約一四〇〇キロメートル）を上回る長さだそうです。お大師さまの信仰が現代においても息づいているからこそ、こうした新しい霊場が生み出されていくのでしょう。



桜前線が日本列島を横断する

さて、こうしたお大師さまと縁の深い霊場の中から、今回は津軽海峡に面する海渡山阿吽寺（北海道松前郡松前町松城）というお寺に注目したいと思います。日本最北の城、松前福山城の鬼門に位置する阿吽寺は、長らく松前藩の祈祷（祈願）寺院としての役割を担ってきました。本尊の不動明王立像は弘法大師空海作と伝わり、北海道指定有形文化財に指定されています。

東日本大震災追悼法要厳修

三月十一日（火）

平成二十三年に発生した東日本大震災から本年で十四年を迎えた三月十一日、高尾山上において「東日本大震災追悼法要」が営まれました。

午前十一時半、震災による犠牲者名簿が納められている有喜苑の東日本大震災物故者供養塔において、未曽有の大津波や震災に関連して犠牲となられた方々を懇ろに御供養申し上げました。

その後、震災の発生した十四時四十六分に合わせ大本堂左陣祭壇において、僧侶と共に参列の皆さまが鎮魂と、被災地の更なる復興をお祈り申し上げました。

東日本大震災物故者供養塔においてご冥福を祈る

阿吽寺の創建については、天正年中（一五七三～一五九二）にお寺の記録が焼失したこともあって詳細は不明ですが、永正十年（一五一三）と伝えられています（『北海道寺院沿革誌』参照）。では阿吽寺に安置されているのでしょう。

松前藩初代藩主・松前慶広（一五四八～一六一六）の六男、松前景広（一六〇〇～一六五八）によって編纂された『新羅之記録』によれば、阿吽寺はもともとは青森の津軽地方にあった寺院と記されています。室町時代の武将で十三湊を拠点に津軽一帯を支配していた安東盛季（生没年未詳）が、嘉吉三年（一四四三年、一説では永享四年（一四三二）に南部義政（一三七四～一四四〇）に攻められ、海を渡った上磯郡茂辺地（現在の北海道北斗市）に逃れた際に携えていた仏像が、この不動明王だったとか（『日本歴史地名大系』他参照）。まさに、阿吽寺の山号「海渡山」を物語る来歴です。

今も津軽には阿吽寺跡とされる山王坊遺跡（現在の青森県五所川原市）が残されています。建武年間（一三三四～一三三八）に阿吽寺の僧弘智が書いたと伝わる『十三往来』には、

阿吽寺の鐘の声は
諸行無常の告を成す
後夜晨朝の勤声は
寂滅為楽の雲を穿つ
これまた殊勝の景物なり

（阿吽寺の鐘の音は、すべてが変化して留まり続けるものはないことを告げ、夜明け方の僧侶のお勤めの読経の声は、悟りを妨げる煩悩の雲を貫く。これらはすべてが心を打たれる姿です）

と見えます。往時の面影を伝える光景でしょう。

中世の日本海交易の拠点として栄えた津軽を離れ、海を渡ったお大師さま自刻と伝わる不動明王。今なお北海道の地において、多くの人々の煩悩（悩み）を悉く打ち砕いていらっしゃるのでしょう。

生まれつつ出で入る息の
そのままに
阿吽の二字の絶え間なければ

（『弘法大師全集』）

（生まれてから出たり入ったりしている呼吸のように、「阿吽の二字」も絶え間なく連続しているよ）

仏教語「阿吽」は物事の「始まりから終わりまで」を意味し、「阿吽の呼吸」とは、口から吐く息（阿字）と口に吸う息（吽字）を表しています。お大師さまが和歌に詠まれたように、私たちは知らず知らずのうちに「阿吽の二字」をお唱えしているのでしょうか。初夏の風に耳を澄ませば、この世はたくさんのお経の息吹で満ちあふれているのかもしれません。

（栃木北部教区普済寺）

高尾山中興開山六百五十年
高尾山 火渡り祭
三月九日　於・自動車祈祷殿大広場

浄火を素足で踏みしめる、火生三昧「火渡りの儀」を行う佐藤貫首

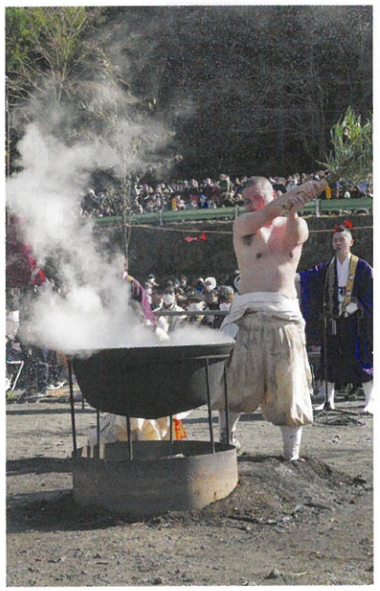
燃え盛る柴燈護摩壇を囲む山伏たちと共に参列者が祈りを捧げる

本年、俊源大徳による中興開山六百五十年を迎えるにあたり「高尾山火渡り祭」が自動車祈祷殿大広場において、佐藤貫首大祇師のもと盛大に厳修されました。

道場内を熱するが如く火焔が立ち上ると、御信徒皆様の願いを込めた「撫で木」が投入され、浄煙となって天へと昇りました。

続く火渡り行の「火生三昧」では、御本尊様の智慧の炎である浄火を素足で踏みしめ、身体健全・身上安全・災厄消除を念じながら、会場に押し寄せた大勢の方々が山伏に続いて浄火を渡り、諸願成就を祈願致しました。

場内の魔を滅する宝剣の儀

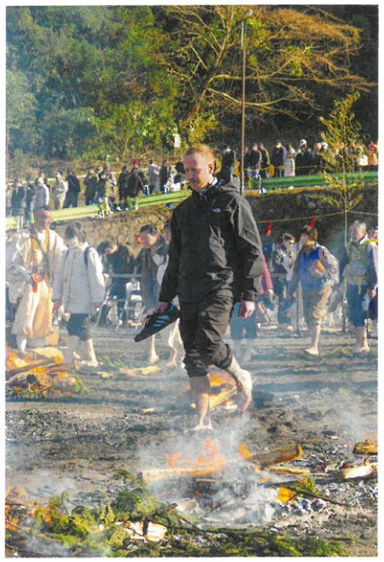

熱湯を浴びる勇壮な湯加持

佐藤貫首より御加持を授かる

千六百名を超える方々が渡火されました

人々の願いが込められた撫で木を
御本尊様に届けるため火中に投じる

梵天みこしと共に街道を練行する


海外からも大勢の方が訪れました

お父さんに抱っこしてもらって火を渡る

山伏と共に火を渡る

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる 64

明治大学博物館　外山　徹

十九世秀観3　文政出開帳始末記（下）

文政三年（一八二〇）の秋から冬にかけて、出開帳を招請した内藤新宿側の不手際から思わぬ江戸長期滞在を強いられたが、ひとまず開帳願は聞き届けられ、支配向きへの手続きは完了した。

賑々しい出立

明けて文政四年正月。まずは末寺蓮乗院の住職方道が江戸へ出府し、各講中からの奉納予定をとりまとめ、開帳場の設営、滞在中の旅宿の手配などをおこなった。方道は去ること二一年前、寛政一二年に一八世秀神の代理として、唐銅五重塔再建に係る寺社奉行所との折衝を任されている。その当時すでに相応の年齢だっただろうから、秀観と同世代か、やや年長と推測されるが、頼りになる存在だった。

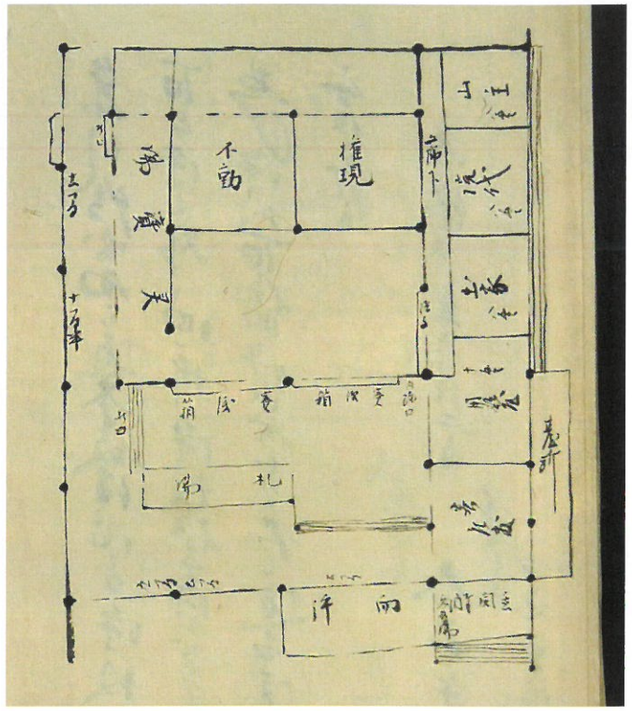
一八日には前年の八月に協力を申し入れていた最寄りの上長房・上椚田両村の村役人や駒木野宿の問屋を招き、荷駄発足時の人馬提供を依頼して酒食を振舞っている。別帳に記すという献立の中身は残念なことに不明だが、硯蓋（四角い硯箱の蓋状の食器）二面、鉢肴三通りの料理でもてなしている。「大人数ゆえ」という記載や「麓、房ケ谷戸、落合[註1]は檀方ほか人数とも残らず呼びそうろう事」とあるので、かなりの人数が同席する場となっただろうから、さながら前祝いの趣であった。

二月も半ば一四日になって両村に使僧が遣わされ、山主・本尊の江戸出立を二三日とすることが知らされる。そしてまず二一日、上椚田村と上長房村から各々一〇、都合二〇人が出て護摩木の荷駄が出発した。二三日は村々から五〇人が出て荷役に任じている。「御輿」が二とあるのは、飯縄大権現像と不動明王像を納めたもので、合わせて二四人がかりで担いだ。霊宝を納めた長持（担ぎ棒を持ち手の金具に通して前後で担ぐ大型の運搬具）が二棹、振分け荷物三荷、机、賽銭箱なども同時に搬送された。秀観の駕籠は先箱（挟箱）・御徒が先導し、寺侍、草履取、長柄、押、合羽箱、跡箱（後箱）が随った[註2]。院代の末寺金泉寺の駕籠には草履取、挟箱が付いている。本尊の御輿に付き添うのは末寺狭間真福寺の観海、高楽寺道心と落川村真照寺弟子大舜である。上椚田村旧家の日記にも「高尾山江戸へ開帳御出、送りに出」と記され、行列したのは荷駄人足ばかりではなく、村の主だった面々も付き添ったようだ。八王子千人町の八王子千人頭[註3]に対する通行の届けには「大勢まかり通り」と記されている。相当賑々しい通行が想像され、秀観にとっては晋山以来の晴れ舞台となった。

その日は府中宿妙光院泊り。翌日、高井戸宿で小休の後、秀観はそのまま新宿へ直行、夕刻太宗寺に着。本尊はここでもう一泊し、御輿から長持へ移された後、翌二五日からは新宿講中が引継ぎ、院代金泉寺が付き添った。本尊と霊宝の長持は新宿ではなく、高輪庚申堂（現在の高輪神社／東京都港区）に向かった。翌朝、秀観が合流。ここから江戸市中を練り歩いて太宗寺入りの趣向で、富士講中が大勢出迎え「御府内在々まで残らずなり」とされるので、相当な人数の行列となったのではないか。行列は高輪から東海道沿いに「芝」「三田」、そして増上寺裏手の町場を進み、「西久保」を経て虎ノ門の手前で左に折れて「溜池」、外濠沿いに「赤坂」、「四谷」御門の前を左に甲州道中へ入り、新宿太宗寺へ到着した。

開帳場の様相

秀観による記録には開帳場の設えについても詳細な記事があり、先の湯島の時にはわからなかったその具体的な様相が明らかである。太宗寺の表門には大手呉服商の伊豆蔵吉右衛門が寄進した幟が二本はためき、堺町講中寄進による大提灯は幅二尺五寸（約七五センチ）に高さ七尺（約二・一メートル）と巨大なものだった。堺町（中央区）は歌舞伎役者などが集住する地区である。境内には仮小屋が普請されたが、間口九間（一六・三メートル）は薬王院本堂と同じ規模で、向拝（庇）付の玄関もありおよそ「仮小屋」という印象のものではない。山主・院代・僧侶の各控室、用部屋、客座敷、台所、札場といった間取りが確認でき（写真）これは成田山新勝寺出開帳本殿仮作事に同様とする。その他、境内には神楽殿、奉納場、番所、手水場といった建物の設置も確認でき、八王子講中寄進の築山、鎌倉河岸講中寄進の四神（玄武・朱雀・青龍・白虎）の鉾、市川団十郎寄進の大提灯、小幟一五本で飾り立てられていた。



開帳場の平面図（法政大学多摩図書館寄託）

文政出開帳始末

賑々しい行列に大がかりな開帳場と、ここまでは華やかで結構尽くしであったが、いざ開帳が始まってみると事態は暗転する。当初の懸念が当たり人の入りが捗々しくない上、四月一〇日から二二日までは将軍家斉の子錫之助病死にともなう鳴物停止によって閉帳。太宗寺での葬儀執行や菩提檀那高遠藩内藤家隠居の参拝によっても度々中断を余儀なくされた。四月二八日には寺社奉行に対し、開帳期日の延長を願い出るが、「辺土場末の儀にて、その上雨天かたがた参詣薄く助成少なにつき」と文面には苦境が述べられている。

大失敗に終わった出開帳は、開帳場の撤収こそ速やかに終えたが、「何事も極々内場」にするため、帰山の節には出立にあたって多大な協力を得た椚田・長房役人へも「無沙汰」となってしまった。このことは「甚だ宜しからず」と反省の弁が記される。記録に「大借金」「大難渋」と度々記される状況では、面目が立ち難い心情ももっともではある。

それでも秀観は冷静に過大な出費の原因を記して、後代のための助言に余念がない。「諸色華麗にいたしそうらえば諸掛りに負け」と伴廻りや開帳場の普請・作事が過剰で、そもそも諸堂修復の助成を名目とするのだから世間への見栄は必要ないと記している。もし開帳を実施するのであれば「下町辺りは格別」とするが、実際庶民の集住区は圧倒的に今日の中央区及び台東、墨田、江東区にかかる隣接地であった。千住、吉原、浅草、蔵前、両国、永代橋、下谷、深川八幡、亀戸に開帳執行の立札を設置したとは言え、開帳のデモンストレーションとも言える練りの行列も江戸の西側の町場を通ったのみで、下町方面へのアピール度は低かったと思われる。

帳面の最後は八王子宿について。今回は出立前の諸手配にその名がなかったが、「雹損につき勧化断りの筋」という事情が記されており、本来であれば「他とも違い当山の事ゆえ、格別の義は出来申さずとも奉納いたすべき」存在であり、「開帳等の節はよくよく八王子と談じ行き届きそうろうよう」と結んでいる。

註1　甲州街道の旧道分岐を過ぎた辺りから自動車祈祷殿の向こう、高尾警察署高尾下駐在所辺りにかけての集落。三四軒の菩提檀家があった。

註2　揃えの具体的な様子については、二月号連載62の記事をご参照いただきたい。

註3　郷士集団である八王子千人同心を統率する旗本衆。八王子宿の西の続きに屋敷を構えていた。

おことわり　本連載では史料の引用について、適宜、読みやすく原文に手を加えています。

当山貫首講演

霊気満山　高尾山

於・東京たま未来メッセ　三月六日（木）

第一生命保険株式会社八王子支社様では、社員研修として高尾山を始めとした、八王子市についての地域学習カリキュラムを行っております。

今回は高尾山で行われている各行事に数多くご参加頂いている御縁から、佐藤貫首が講師として招かれて高尾山の歴史や地理、そして現在まで受け継がれ、地域の皆様と連携して行われる諸行事などについてお話致しました。

当山貫首講演

智山青年連合会講習会【修験道入門】

於・総本山智積院別院真福寺　二月二十七日（木）

真言宗智山派の青年僧が集う組織である智山青年連合会（原祥寿会長）主催により講習会【修験道入門】が総本山智積院別院真福寺にて行われました。

全国より集まる智山派青年僧述べ八十名に向けて佐藤貫首が講師として修験道の成り立ちと、修行の心構えや山伏独自の護摩について講演致しました。

八王子車人形後援会総会

於・八王子エルシィ　二月二十八日（金）

八王子エルシィにおいて、八王子車人形後援会の通常総会が行われました。総会には、後援会長を務める佐藤貫首も出席致しました。

八王子車人形を伝承する西川古柳座は高尾山とも御縁が深く、節分会などには、一門揃ってお越しになっております。

近年では国内のみならず海外でも公演して活躍されており、現在は国の重要無形民俗文化財に指定されております。

いけばなの心 61

華道教授　佐藤　宗明

花材：五葉松、ナデシコ、山茱萸、小手毬、ミヤコワスレ、つげ、ナルコラン、若松

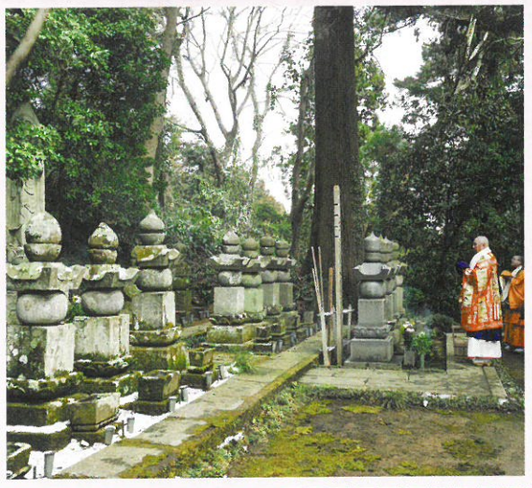
あっという間に四月、新たな年度の始まりを迎えました。桜の花が咲き始める三月下旬、池坊では日本最大級の花展が上野・東京都美術館にて開催されます。今回は、私がこの花展に出瓶した作品をご紹介いたします。

出瓶したのは「立て花」という様式の作品です。中心には凛とした松を据え、その周囲を取り囲むように草花を配しました。今回使用した花材は、花木の山茱萸や小手毬に加え、やさしい風合いをもつナデシコやミヤコワスレなど。ひとつひとつの花に思いを込めながら組み合わせました。

立て花には、日本の自然への畏敬や仏前への供花の精神が色濃く息づいており、「祈りの花」ともよばれます。生けるひとときは、自然と心が澄みわたり、静けさの中に深い祈りが満ちていくようです。

春彼岸先師墓地参り

三月二十日（木）



春季大祭（2）

日本遺産藝妓英
紅艶美麗如傾城
照片拍攝緊張極
向慶賛會欣賞誠

厚木市　荒井　一雄

春季大祭（2）

日本遺産・八王子芸妓衆の艶姿…
紅艶・美麗、傾城の如し…
写真撮影には極、緊張す…
お座敷に上がらずして
かくも絶世なる綺麗処と
お見合ひ出来るとは、
入会させて戴きし
『慶賛会』様に誠に感謝…

胸ドッキリ

牡丹の如く
芸妓衆

観音菩薩の宗教 ⑧⑧

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

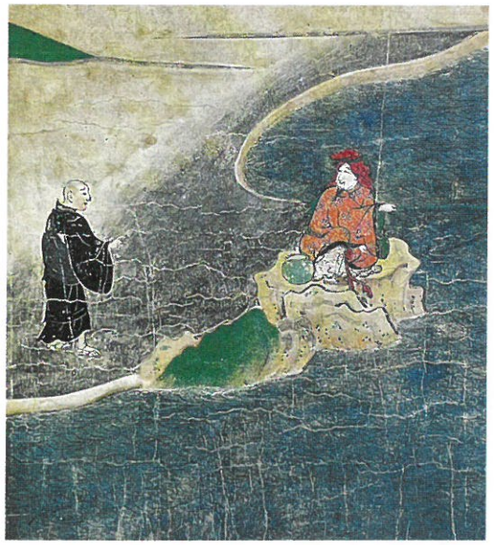
如意輪観音（その26）

前号では、平安貴族の女性がこぞって石山寺に詣でたり籠ったりしたことを見た。彼女たちはそれぞれの願いや悩みを抱えて石山寺に詣でており、それは石山寺の本尊である如意輪観音が女性の尊崇を集めていたことの証しであった。それに加え、彼女たちの思いを読み解けば、如意輪観音が多様な願いを受け入れる「ほとけ」であったことも明らかになる。貴族女性に限られているとはいえ、こうした「女性の自立性」や「主体性」、文化的素養の高さは日本文化の特質と評価し得る。このことは重要な問題であるので、今後、仏教的側面から論じる予定である。それに先んじて今号では、石山寺の草創にかかわる歴史や伝承を考察することにする。

石山寺の創建を記した基本資料のひとつは、後世の資料ながら『石山寺縁起絵巻（以下、『縁起絵巻』）』である。『縁起絵巻』は巻一の詞書中に記される鎌倉時代の正中年間（一三二四～一三二六）に近い頃の成立と推測されている（小松茂美［監修・解説］『石山寺縁起』日本の絵巻16、中央公論社、一九八八年、一一九頁。一〇〇頁。梶谷亮治「石山寺縁起絵巻と石山寺の古美術」『石山寺の美―観音・紫式部・源氏物語』奈良国立博物館、二〇〇八年、一六頁）。石山寺創建について『縁起絵巻』は第一段冒頭で次のように記す。（）は綾村宏（「石山寺の歴史と信仰」『石山寺の美―観音・紫式部・源氏物語』一一頁）、ルビは金岡による。

「夫れ石山寺は、聖武天皇の勅願、良弁僧正の草創なり。本尊は二臂の如意輪（観音）、六寸の金銅の像、聖徳太子二生の御本尊（なりと）云々。丈六の尊像を造（り）て、其の御身に彼（の）小像を籠め奉る。左右に脇侍あり。左は金剛蔵王、右は執金剛神なり」とある（巻一、一～七行。小松茂美［監修・解説］前掲書、図版二頁および一一頁）。

右の所説によれば、石山寺は天平時代の聖武天皇の発願に基づき、東大寺初代別当であった華厳宗の良弁の創建になる。良弁は聖武天皇、行基、および天竺よりの渡来僧・菩提僊那(Bodhisena)らとともに東大寺創建に功労のあった「四聖」のひとりに数えられる。右に「聖徳太子二生」とあるのは、第二の生、すなわち生まれ変わりの意で、聖武天皇と見ることができよう。これは聖武天皇が聖徳太子の転生者とする信仰に基づく思想であり（拙稿「観音菩薩の宗教」㊾㊿）、石山寺の本尊は聖武天皇が本尊としていた二臂の如意輪観音ということを指している（綾村宏前掲論文、一一頁）。この如意輪観音は六寸（約十八センチ）ほどの小型の像で、これを納めるために丈六（四・八五メートル）の像を造った。その像の脇侍として左右に金剛蔵王と執金剛神を祀ったという。



良弁が比良明神の化身に出会った場面。『石山寺縁起絵巻』六紙。小松茂美書（本文参照）、五頁。

この文に続いて『縁起絵巻』は「凡そ仏法の効験、権者の化儀、理、常篇にたえ、事、幽玄に出たり。然るを、殊に当寺の濫觴は、本朝の奇瑞なり」（第三段、一一～一二行。小松前掲書、図版二頁および一二〇頁）として、石山寺の創建が霊験に満ちていたことを述べる。試みに右を現代語訳すると、「およそ仏法の功徳や、仏菩薩の権化が衆生を導くこと、またその「理」法は常識を大きく超えており、それが具体的に現れた「事」は奥深く計り知れない。ところで殊に石山寺の始まりは日本のめでたき前兆である」とでもなろう。石山寺の創建に関する記述で、効験、化儀、常篇にたゆ、幽玄、奇瑞の語を用いていることは、石山寺と如意輪観音の功徳、働きの大きさを宣べていることになる。

さらに『縁起絵巻』制作の理由として、「将来の見聞にそなえ、王公卿士（天皇や公卿・殿上人）よりはじめて、幼い女子供に至るまで、この石山寺の二臂如意輪観音の平等利益を得させ」るためと記す（小松、前掲書、九九頁）。ここで石山寺本尊の如意輪観音とあるのは小松茂美の解釈で、原文では「大慈大悲」とある（同前）。『縁起絵巻』には、室町時代の補写（巻第四、六段）や江戸末期の補写（巻第六、四段）があるが、制作時には全七巻、計三三段であった。この三三という数字は、観音菩薩の化身が「三十三身」であるとする『観音経』などの思想による（拙稿「観音菩薩の宗教」⑨）。このことは『縁起絵巻』巻一、四八～五〇行に「大慈大悲分身応化の数に擬して、三十三段満足所求の篇をたつ」とあることからも明らかである（小松前掲書、図版二ページおよび一一九頁）。

石山寺草創の地を決定したことについても、『縁起絵巻』は奇瑞を述べている。それによれば、聖武天皇が十六丈の金銅の盧遮那仏、すなわち大仏を造立しようとしたが、我が国には黄金がない。そのため良弁に勅して吉野の金峯山に祈らせると金剛蔵王の夢告があり、近江国志賀郡の山が示された。良弁がそこを訪ねると比良明神の化身の老翁に会った。その教えで山中に草庵を建て、巌の上に天皇から預かった念持仏を安置して秘法を勤修すると、陸奥国から朝廷に黄金が献上された。その後、天皇の念持仏を返そうとしたが、仏は石の上を離れなかったので、東大寺に先立ちそこに寺院を建立した。これが石山寺であり、本尊の如意輪観音は岩の上に安置されているとされる（綾村宏前掲論文、一一頁）。この伝承によれば、比良山系における山岳信仰と良弁がむすびつき、さらに石山寺にいたるという神仏習合の思想・信仰が読み取れる。石山寺と如意輪観音が日本人の精神において重層的たる証左である。ただ、良弁が持っていった聖武天皇の念持仏が、『縁起絵巻』冒頭に述べられた念持仏と同じか別のものであるかは、『縁起絵巻』は語るところがない。『縁起絵巻』は、さらに、「凡（そ）我（が）朝に、観音垂跡（→迹）の地多しと雖も、霊験の奇特を現はすこと、当寺に過ぎたるは無し」（巻一、第三段、一一～一三行。小松前掲書、一二〇頁）と述べ、冒頭から続いて石山寺の功徳を強調している。

上述の如く『縁起絵巻』は本尊を二臂とするが、この像容は密教経典の説く如意輪観音とは異っている。同じく東大寺大仏左脇侍の如意輪観音も、焼失以前は施無畏印・与願印を結び片足を踏み下げた二臂像であり、本来の尊名は観音であったが、ある時期から如意輪観音とされてきた。かかる二臂の如意輪観音像は石山寺において成立し、さらに東大寺へと伝播したとされる（清水紀枝「院政期真言密教をめぐる如意輪観音の造像と信仰」早稲田大学博士論文、二〇一一年、https://core.ac.uk/download/pdf/286920428.pdf、三五頁）。清水紀枝によれば、十世紀末から十二世紀にかけて、醍醐寺僧の淳祐らが石山寺に進出し、彼らの如意輪観音信仰が石山寺に及ぼされたという（同前）。なお、石山寺は承暦二年（一〇七八）に焼失し、一三世紀に叡尊が本尊を再興したとの記録もある（同、三九頁）。

思想上の視点から重要なのは、石山寺の縁起にまつわる奇瑞が聖徳太子との関連で述べられている点である。現在の六角堂本尊は六臂で鎌倉時代の作とされるが（井上一稔『如意輪観音像・馬頭観音像』日本の美術5、至文堂、一九九二年、四二頁）、上述のごとく伝承では石山寺本尊と同様と伝えられた。のみならず、六角堂の縁起もまた、石山寺同様、聖徳太子とのつながりを述べている（「観音菩薩の宗教」㊻）。しかもその挿話には近似する点が多い。これより見れば、聖徳太子が日本人の精神史において、心柱ごとき位置を占めてきたことがわかる。

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「春の訪れ」

八王子市　栃谷怜子 様

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

三十九段　周りの人と親しく接し　学ぶ姿勢を常に持つ

他人との良好な関係を築くことで、他人の思考という別の視点から、様々な経験から学びを得ることができるでしょう。そのためにも、謙虚な姿勢を保って学び続けることで、自己成長を促進することができるでしょう。

高尾山 季節散歩

和風月名　花残月「はなのこりづき」

ここでいう花とは「桜」を指しています。現在の四月とは違って旧暦四月は初夏にあたるので、桜も散っている時期です。

しかし北日本や東日本の山地では、まだ残っている桜の花を楽しむことができたので、そこからこの名前がつけられたそうです。

今月の風物詩　遠足（えんそく）

遠足といえば、現在では学校などで行われる、日帰り旅行の行事です。

屋外での食事や友達と一緒に出掛ける楽しい行事ですが、集団行動を学ぶ大事な場ともなっており、高尾山にも四月や五月には多くの保育園や学校など子供達が遠足に訪れます。

高尾山の昆虫　186

トウキョウヒメハンミョウ

ハンミョウと聞くと極彩色のナミハンミョウを思い浮かべ、そして少し地味ながらやはり大型種のニワハンミョウ、共に高尾山で見られます。

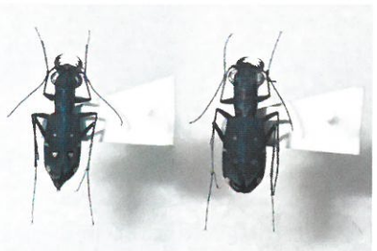
そして、もう一種トウキョウヒメハンミョウ（東京姫斑猫）という種名にトウキョウが付く種が生息しています。

一センチくらいの小型種で、身軽に活発に動き飛び回る様子はハエを思わせ、小型の昆虫等を捕食します。体色は暗銅色で渋めですが鈍い金属光沢があり、光が当たると緑色に輝き、上翅には八個の白紋を備えます。

東京を中心とした関東地方と山口県や福岡県に分布するという特異性を考えると、外来種である可能性が高いと思われます。

本種は亜種名が江戸に因む yedoensis とされ、沖縄には別亜種が分布し、中国大陸や台湾を故郷に持つ種が何らかの理由で移入された可能性が高いです。

局地的ながら東京都では多産地も少なくなく、トウキョウの名を冠する帰化昆虫として市民権を得ているように感じます。



（標本 小畑　裕　撮影・文 松島　孝）

おはなし散歩道

薬師参り

湯沢町　富樫　あい子

四月八日は、魚沼薬師さまのお祭りです。

りんは新学期が始まるので東京へ帰ります。薬師さまは山の入り口に木の鳥居がある、小さな石の祠（ほこら）です。

魚沼の薬師さまは、目の病気を治してくれる神さまで、薬師さまにお参りすれば病気にかからないと聞いていました。

大雪で積もった雪も南風が吹いて雨が降ると、どんどん溶けます。

薬師さまへ行くまでの細い山道には、フキノトウやコゴミが雪の消えた後に黄色く芽吹き、春の風に揺れながら咲いています。ネズミのチュウ助は山菜を摘（つ）み始めました。

「山菜の香りや苦みは冬の疲れをとってくれるから土産に持って行け！」

「そうね。私も摘むわ」

りんもフキノトウを摘み始めました。

「薬師さまにお供えして持って行くといいよ」

「そうね！」

りんは張り切ります。

「頑張っておるのぉ～」

ひい爺さんも来ました

爺さんは早く起きて薬師さまに、煎り豆を白い封筒に入れて持ってきました。お参りに来た人に持ち帰って頂くのです。

ひいお婆さんが豆を煎っての薬師参りは六十八歳で亡くなるまで続きました。その後、ひい爺さんが続けています。

ひい爺さんが煎り豆を持ってお参りに行くと、早起きの村人たちが何人かがお参りに来たと見えて、紙に包んだ煎り豆が幾（いく）つも祠の前に備（そな）えてありました。風で火の消えたローソクが何本も残っています。お参りを済ませると先に備えてある豆の包みを一つだけ持ち帰り、家族で分けて食べると目の病気に掛からないというまじないでした。

ひい爺さんは祠の周りを片付けホオジロなどの小鳥が枝から枝を渡りチッチッと鳴く姿を眺めています。

雪国の待ちに待った春を感じているようです。

ひい爺さんはりんを呼び祠の周りに出ているコゴミを指指して、

「これを摘んで持って行け毎年煎り豆と山菜をりんちゃんの家に送っていたのだ。今年はりんちゃんが摘んで持って行け」

二人は、沢山摘みました。チュウ助も二人に負けないほど摘みました。

三人は山菜を薬師さまにお供えして無病息災を願ってお祈りしました。

「帰ったら煎り豆をみんなで食べて山菜料理を食べて健康に暮らせよ」

ひい爺さんの言葉です。

りんは帰りの新幹線に乗りながら、祭りといえば縁日が出てにぎやかに境内を飾ることしか思い浮かばないのに、自然界の静かな中で健康を考え祈るひと時は、春休みの思い出深いものとなったなと思っていました。

でも、老人が居なくなり子供たちが少なくなる薬師参りはどうなっちゃうのかな？祠の周りの田んぼはもう稲をつくらないので、草が生（お）い茂ってる、そんなことも考えていました。

「ただいま～」

「待ってたわ。山菜を」

「まあひどい、私じゃないの？」

母子（おやこ）は抱き合い、魚沼の話と食に花が咲きました。（完）

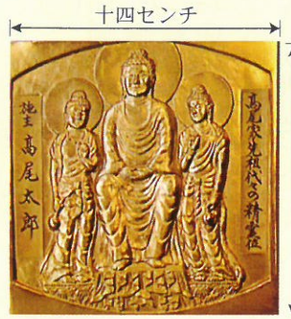
（挿し絵・小出　茂）

高尾山仏舎利塔 結縁牌懸仏（かけぼとけ）のおすすめ

高尾山にはタイ王国・王室より授けられた、大聖釈尊の真身骨を奉安している仏舎利塔があります。そしてその周りを囲むように建立された百観音お砂踏霊場がございます。

御信徒各位には、釈尊との御勝縁を結ばれますよう、仏舎利塔内に結縁牌懸仏（かけぼとけ）をご納仏されることをお勧め申し上げます。

この結縁牌懸仏は、夫々（それぞれ）のご家族の先祖代々供養の為に、あるいは講中、参拝団の物故者慰霊の為に、お釈迦様と御信徒の皆様との尊いご結縁のしるしとして、霊名あるいは施主のご芳名を刻み、仏舎利塔内壁面に奉安し、大聖釈尊の聖骨と共に幾久しく供養されるものであります。



御納仏冥加料
一体　拾万円也

尚、お申し込みの方には「御納仏回向之証」をお授け致します。（左の写真）

高尾山報助成金志納者 御芳名（順不同・敬称略）

富岡市　大手　邦裕
相模原市　岩橋　清美
川口市　角　米子
邑楽郡　松村　静雄
大田区　上野　泰子
川越市　倉橋　夏子
熊谷市　妻沼飯縄講　淳
〃　石井　京子
白井市　吉田　尾崎　ふみ江
板橋区　大鷲　昭子
邑楽郡　㈱ヒラツカ印刷社
八王子市　東大和市　中川　彰久
匝瑳市　吉祥院
足立区　中山　恵司
八代市　庄司　和了
北九州市　山口　展弘
富里市　森　照森
杉並区　清水　佐
新座市　彰山　粧麗
熊谷市　今泉　勝己
新潟市　長嶋　正栄
八王子市　小倉　真寿雄
茅野市　原　光男
熊谷市　吉野　六雄
八王子市　倉石　芳和
三鷹市　長田　吉雄
日野市　岡田　志美子
佐渡市　金沢　睦子
尾道市　榊原　正博
武蔵野市　金子　満
八王子市　新井　茂二
〃　塚本　房子
我孫子市　守屋　直
鴻巣市　島崎　智恵子
練馬区　伊藤　裕子
大月市　岩沢　うめ
行田市　新井　克恵
さいたま市　遠藤　隆雄
比企郡　高橋　多美
伊勢崎市　岩村　鎌市
吾妻郡　湯本　美和子
横須賀市　山本　康弘
〃　利春
秩父市　前原　啓作
川口市　飯島　よし子
佐野市　荒居　幸子
八王子市　佐藤　亮
桐生市　野中　カヅ子
横浜市　亀田　登一
練馬区　星　典子
長野市　宇都宮　幸男
青梅市　大原　竹生
東近江市　森島　照光
町田市　串田　高幸
川崎市　大島　一将
小平市　関　道雄
大村市　久保　富美子
さいたま市　日向　久美
〃　関根　三善
高尾山健康登山者一同

高尾山内八十八大師巡拝のご案内

多くの方が参拝できますよう左記のように二つのグループに分け、途中（山上十一丁目茶屋前第十七番札所）で合流し、一緒に巡拝いたします。

A、不動院から琵琶滝を経由して薬王院まで歩く

B、ケーブルカーを利用する
（琵琶滝周辺の御大師様は巡拝出来ません。
また、ケーブル代金は自己負担になります。）

日　程　五月十三日（火）

行　程　山麓不動院→琵琶滝→仏舎利塔→本堂（護摩修行）→坊入（昼食）→一号路（下山）→不動院（献灯式・閉会式）→解散

参加費　五千円（昼食代・保険料含む）

集合場所　山麓不動院（八時半集合）

定　員　四十名　※定員に達し次第募集終了
（当山ホームページにて告知）

申込方法　ハガキに郵便番号、住所、氏名、生年月日、性別、電話番号を明記の上、左記までお申込み下さい。
または、ホームページ・QRコードからお申込み頂けます。その際には必要な事項をフォームに入力して下さい。

募集期間　四月十五日（火）～五月六日（火）必着

〒一九三―八六八六
八王子市高尾町二一七七
大本山高尾山薬王院　八十八大師係

※申込み後、順次行程表・詳細をお送り致します。

第百二十四回 信徒峰中修行会開催のお知らせ

高尾山峰中修行会は、一泊二日の行程で執り行います。初日は滝修行と回峰行、二日目は未明からの回峰行、山内諸堂参拝、柴燈護摩等を予定しております。

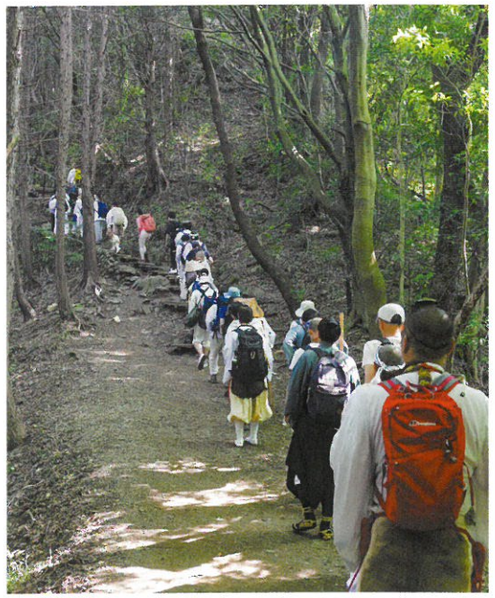
行程・費用その他の詳細につきましては、五月上旬より当山ホームページにおいて告知させて頂きます。

なお、開催日程と募集期間は左記通りとなりますので、宜しくお願い致します。

開催日程　六月一日（土）～六月二日（日）

募集期間　五月六日（火）九時～
五月二十七日（火）十五時

定　員　四十名（定員に達し次第募集終了）


山中を回峰行する一行

登山だより

五月行事日程

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）

十二日、二十四日
弁天秘供

八日
仏舎利詣り（仏舎利塔）

十三日
高尾山内八十八大師巡拝

十二日、二十日
御詠歌勉強会（十時不動院）

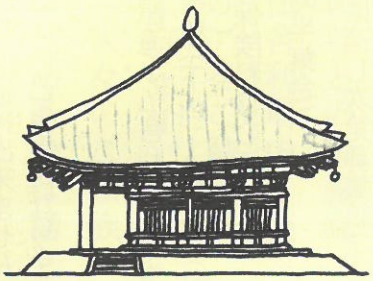
十八日
高尾山天狗社開扉法要

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供

二十四日
月例写経会
（十三時山麓不動院）

二十七日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
（十二時半山麓不動院）

二十八日
琵琶滝不動尊御縁日
奥の院開扉供養
（十時奥之院）



毎日のお護摩奉修時間

午前9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

神徳報謝百味飲食供 御志納のおすすめ

当山では、御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝するために、御縁日である二十一日に、沢山のお供物（百味）を捧げて、大般若経六百巻を転読し、供養申し上げる法要を執り行っております。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は問い合わせ下さい。

尚、法要終了後に大本堂にて百味供養の御札を授与致します。

また、当日参加できない方にはお札の郵送も受け付けております。

毎月二十一日　午前九時（於大本堂）
御志納金　一口　三千円以上

大般若経を守護する十六善神の図

高尾山報助成金 御志納のお願い

当山では、大護摩修行等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報をご送付しております。

引き続いてご愛読して頂けますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　犬山秀康
編集人　菅井倫浩
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます

高尾山薬王院ホームページ
https://www.takaosan.or.jp